

第5回霞ヶ浦葦舟世界大会 出場者へのインタビュー

1. トトラの会（3年連続3回目）

キャンプや山登りなどを行う友人グループ。埼玉県飯能市、東京都あきる野市、福島県いわき市など、各地から集まっている。ペルーのチチカカ湖に共通の関心がある。チチカカ湖はトトラ葦で作られた浮島の存在で知られており、会の名前もトトラ葦からとられている。

3年前から参加しており、その時は霞ヶ浦アカデミーのウェブサイトを見て、自分たちは環境問題にも関心が高かったので、環境浄化を葦舟と絡めて試みていることに興味を引かれた。3年間続けて参加しているのは1人で、毎回、声をかけて参加できる人が参加している。今年は参加できなかったけれども、来年、都合がつけば参加したいという仲間もいる。

3年参加しているが、舟を作ることや漕ぐことの実験が積み重なっているとはいえない。ただ、葦の刈り方は慣れてきたと思う。

今年の舟づくりのこだわり？ 作り上げるので精一杯、とにかく沈まない舟で、漕ぎやすい舟であればよい。作る上で、今年は、舟の芯の部分に太い葦（しっかりした葦）の束をあててみた。

2. フォレストメディアワークス（3年連続3回目）

代表のN氏は岐阜県からの参加。長良川でカヤックに乗っている。いろいろな舟を操った経験がある。他のメンバーは栃木県と水戸市からやってきた。本来は別のメンバーが参加予定だったが、急遽来られなくなったので、水戸の知り合いが助っ人で参戦。N氏と水戸の女性は初対面。栃木のメンバーが友人である彼女を誘った。N氏の参加のきっかけはネットで大会のことを知ったから。葦で舟を作って乗ることを興味深いと思った。

前回は優勝したのでディフェンディングチャンピオン（ただし、技術的に優れた葦舟の部門。スピードレースについては最下位だった。船体を短くして、旋回性をよくしたいという狙いだった。ただし、安定性が悪く、すぐこけてしまった。丸太棒に乗っているような乗り心地で操船が難しい。前回は小さく作りすぎたので、今回は少し大きく作ってみた（とはいえ参加チームの中では最も短い船体）。漕ぎ手の人間の大きさと舟の大きさが、舟の漕ぎやすさや安定性に関わり、前回は漕ぎ手の体格と比して小さすぎたという反省があった。

舟のデザインとして、下部をより堅くして舟が潰れないように工夫したほか、つくばに「JAXAがあることに敬意を表して」ロケットのような形にした。舟の中に乗るような形態（一般には舟の上部は窪んでいる）ではなく、丸太のように中央部が高くなっていて、それにまたがる形態になっている。また、船体の左右に葦のサイドフロートを取り付けることも試みられている。今回は「過去一の出来。技術賞の2連覇をするぞー」。この思惑が功を奏するかどうか。「企画倒れに終わるんじゃないかな」とつぶやいていた。

3. 八郷エンヤトット泥舟団

地元霞ヶ浦沿岸（石岡や八郷など）からの初参加グループ。仲間たちは八郷が主な遊びの場で、山の方が活動の場で生活圏となっていて、普段は舟とは関係ない。6名のメンバーで、地元の友人グループ。地元とはいいつつも、都会からの移住者の集まり。チーム nicomaro とも友人で、そのメンバーに誘われて参加した。大会に参加することを、友人らに話をしたら、加わることになったり、次は参加したいという声が上がったりした。

もともと霞ヶ浦とのつながりがあった訳ではなく、霞ヶ浦は通るときに見るところくらいの認識だった。今回参加して、水辺が楽しいところになった。また、葦を刈っていると、地元のお年寄りに、本当は自分たちが刈って手入れをすべきなのだけれども、刈ってくれて助かる、ありがとうと感謝された。自分たちは楽しんでいるだけなのに、地元の人に喜んでもらえて気分がよい。差し入れまでもらった。

舟のこだわりは、とにかく沈まないこと。ただし、車で来ているので、少し遠くまで行って葦を刈ってきた。この葦は、他のチームと少し違って、太くて、茎が緑色をしていて、竹のような見た目をしている。葦ではなく違う植物（篠竹？）ではないかという見立てもあるが、あまり細かなことは気にしない。ただし、他のチームと比べて、材の見た目がちょっと違う。そのことがどう出るか？ 頑丈そうだが、6人でもうまく持てないほど、重たいそうだ。

4. 上野 lovers

「上野先生」を呼びかけ人とする同じ職場（医療関係）の友人グループ。上野先生には、日頃から遊びを教してもらっている。千葉からの初参加グループ。霞ヶ浦アカデミーのフェイスブックをみて興味を持った。職場で話したら、「おもしろそう」と盛り上がった。助っ人として、霞ヶ浦でカヌーに乗っている友人を呼んだ。初心者で、葦のこととかを全くわからず、最初は葦がどれなのかからわかっていなかった。

舟を作る際に、葦が少し足りない気もしたし、メンバーの最小の3人でもあり、コンパクトな舟とした。1人用の葦舟である。制作途中で、舟は右回りしかしないのだから、右に回りやすいように偏心率を高めようかなどとの話も出ていた。どんな舟を作るのか、相談しながら作業をしていった。舟の出来は、「安定しているんじゃないか」。

葦舟づくりへの子どもの感想は、「しんどかった」。

5. Lutri Lutra

環境研（つくば）の職場仲間。外国人の混成チーム。ハンガリー、ドイツ、ロシアからの3人と、子どもが1人の4人チーム。前回の大会を見ていて、楽しそうだったので参加することにした。チーム名は、ハンガリー語で、「福袋のカワウソ」という意味である。日本のイベントは、外国人の参加を促して行くには、コミュニケーションの問題がよくある。杯争奪第5回葦舟世界大会の人たちはウェブサイトにて英語の説明書と申し込みガイドを用意し

てくれたので、限られた日本語の能力でも参加できるようになった。

舟のこだわりは、「楽しく作る」こと。沈まなければ OK で、3 人が交代で漕ぐ予定。

舟造りは初日の最後まで時間をかけており、かなりきれいに丁寧に作られていた。葦を縛る麻紐の間隔は全参加チーム中でもっとも細かく、他のチームのメンバーからも「きれい」と言われていた。漕ぎ手は女性 2 人と男性 1 人。代表の女性はカヤックの趣味を持っている。

6. 7. シン葦わらの海賊団、葦わらの海賊団

環境研（つくば）の同僚グループ。こちらは日本人チーム。前回は初参加で、その時は 1 チームで参加した。全会はチーム中の 7 位だった。去年はスタート直後に水没してしまった。2 度目の参加になる。最初は森さんからの紹介。1 度参加して、評判がよく、参加人数が増えたので今回は 2 チームで参加することにした。去年のレース後に職場に葦舟同好会を作った（とはいえ途中の活動はないので今回、初めて活動記録が書ける）。

前回の感想として、舟が重くて操船が難しかった。

葦わらの海賊団の代表は T 氏で、風貌から？「船長」ということになり、それなら海賊団という名前がいいんじゃないということで、このチーム名になっている。シン葦わらの海賊団は、それへの対抗で「シン」になっている。シンチームはスピード重視の作戦らしいが、両チームは同僚でもあり、一緒に舟をつくっていた。本番のレースも出走位置が隣同士なので対抗心があるらしい。

去年の出場時に、作り上げるのは早かったものの、締め付けが緩くて、進水してすぐにほどけて浸水してしまった（舟が最初からくたっていた）。それを教訓として、今年は説明書を読んで（1 人だけ）、ビデオも見て準備した。今回はとにかくきつく締めることに注意した。

8. カーペンターズ

神奈川県から参加予定の外国人チームであったが欠場。作業場に材料とすべき葦が寂しげに置かれていた。

9. チーム nicomaro

2 回目の参加で、地元中の地元、行方郡からの参加者である。Nico は会社名で夫婦と娘が中心で、前回は家族での参加だったが、今回は友人の maro さん（土浦）が加わって、4 人のチームになっている。Maro さんは、去年は見学だった。今回は、見て覚えて参加した。アカデミーの菊地さんの紹介で参加した。娘さんは小学生で、葦舟の活動を総合学習の時間に発表するとのこと。

前回は 3 位となったので、今回はよりよい成績を狙っている。去年の反省点として、葦の量が少なく沈みがちだった。そこで、今回は前回よりも、葦の量を増やした。去年より完成

度は上がったと思う。船体をそらせた形にしてみたいと考えている。

「めざせ優勝！ 二冠を狙うぞ」

10. まるごといんばぬまプロジェクト

千葉県から参加のチームで今回が初参加。千葉県の印旛沼で「まるごといんばぬまプロジェクト」という活動を行っている。印旛沼のかかえるいろいろな環境問題に楽しく取り組むべく、SNS で知った、「自分たちのところでもやってみたい」と霞ヶ浦での活動を参考にするために、参加した。今年度に行われた3回のワークショップにも全回参加してきた。

代表の K 氏は千葉県職員（かつ麻生町出身で、子どもの頃には霞ヶ浦や北浦で泳いだこともある）であるが、印旛沼の環境対策に行政がどうも後ろ向きなのではないかと思っている。子どもたちへの環境学習でも、「印旛沼は汚れている」というところから教えはじめ、外来種の問題など、問題点を教えている。カミツキガメを駆除すべきとか、ナガエツルノケイトウも駆除すべき（駆除費用が結構かかっている）というような感じで、問題があるのだという伝え方をしている。そして、子どもが水辺にやって来たとしても、「危ないから、水辺に近づいてはいけない」と諭されてしまう。それでは、印旛沼を良く思ってもらえない、親しみを感じてもらえないのではないか。そうではなく、印旛沼は楽しい、おいしいなど、親しみを感じるところからの入り方が望ましいのではないか。そして、来てくれたら、そこで沼が環境問題を抱えていることを伝えて、一緒に行動することをうながせたらよいのではないか。

このプロジェクトは、そのような思いに共感する人たちが、興味を持った活動に参加できる場であればよい。活動については、随時 SNS で情報発信していて（今回の葦舟大会も同じ）、それで興味を持った人に参加してもらっている。「楽しいからおいで」と人を集め、楽しみながら、環境問題も意識するようにしたい。

ちなみにプロジェクトの幟をつくっていて、そこには2匹のウナギが描き込まれている。霞ヶ浦との接点もある。

この葦舟大会もいつか、印旛沼でもやってもらいたい。

葦舟をつくってみて、人間って頭いいなと思った（昔の人はよくこういうものを作り出したと感心した）。